

# 藍色の墓

大手拓次

青空文庫



## 藍色の墓

森の宝庫の寝間ねまに

藍色の墓は黄色い息をはいて

陰湿の暗い暖炉のなかにひとつの絵模様をかく。

太陽の隠し子のやうにひよわの少年は

美しい葡萄のやうな眼をもつて、

行くよ、行くよ、いさましげに、

空想の獵かりうど人はやはらかいカンガルウの編靴あみぐつに。

## 陶器の鴉

陶器製のをあをい鴉、からす

なめらかな母韻をつつんでおそひくるあをがらす、

うまれたままの暖かさでお前はよろよろする。

くちばし 嘴の大きい、眼のおほきい、わるだくみのありさうな 青あをがらす 鴉、

この日和のしづかさを食べる。

## しなびた船

海がある、

お前の手のひらの海がある。

苺いちじくの実の汁を吸ひながら、

わたしはよろける。

わたしはお前の手のなかへ捲きこまれる。

逼ひつそく塞なした息はお腹なかの上へ墓はか標じをたてようとする。

灰色の謀叛よ、お前の魂を火皿ほざらの心にささげて、

清浄に、安らかに伝道のために死なうではないか。

## 黄金の闇

南がふいて

鳩の胸が光りにふるへ、

わたしの頭は醸された酒のやうに黴の花をはねのける。

赤い護謨ごむのやうにおびえる唇が

力ちからなげに、けれど親しげに内輪な歩みぶりをほのめかす。

わたしは今、反省と悔悟の闇に

あまくこぼれおちる情趣を抱きしめる。

白い羽根蒲団の上に、

産み月の黄金わうごんの闇は

悩みをふくんでゐる。

## 槍の野辺

うす紅い昼の衣裳をきて、お前といふ異国の夢がしとやかにわたしの胸をめぐる。

執拗な陰気な顔をしてる愚かな乳母うばは

うつとりと見惚れて、くやしいけれど言葉も出ない。

古い香木のもえる煙のやうにたちのぼる

この紛ふんらん乱した人間の隠遁性と何物をも恐れない暴逆な復讐心と

が、

温和な春の日の箱はこぐるま車くるまのなかに狎なれ親しんで

ちやうど麝香猫と褐色の栗鼠りすとのやうにいがみあふ。

をりをりは麗しくきらめく白い齒の争鬪に倦怠の世は旋風の壁模様に眺め入る。

### 鳥の毛の鞭

尼僧のおとづれてくるやうに思はれて、なんとも言ひやうのない寂しさ いらだたしさに張りもなくだらける。

嫉妬よ、嫉妬よ、

やはらかい濡葉ぬればのしたをこごみがちに迷つて、

鳥の毛の古甕こがめいろ色の悲しい鞭にうたれる。

お前はやさしい悩みを生む花嫁、

わたしはお前のつつましやかな姿にほれる。

花嫁よ、けむりのやうにふくらむ花嫁よ、

わたしはお前の手にもたれてゆかう。

撒水車の小僧たち

お前は撒水車をひく小僧たち、

川ぞひのひろい市街を悠長にかけめぐる。

紅や緑や光のある色はみんなおほひかくされ、

Silence 《シイランス》と廃滅はいめつの水色の色の行者のみがうろつく。

これがわたしの隠しやうもない生活の姿だ。

ああわたしの果てもない寂寥を

街のかなたこなたに撒きちらせ、撒きちらせ。

撒水車の小僧たち、

あはい予言の日和が生れるより先に、

つきせないわたしの寂寥をまきちらせまきちらせ。

海のやうにわきでるわたしの寂寥をまきちらせ。

羊皮をきた召使

お前は羊皮やうひをきた召使だ。

くさつた思想をもちほこぶおとなしい召使だ。

お前は紅い羊皮をきたつつましい召使だ。

あの ふるい手なれた鎔炉のそばに

お前はいつも生いきいき生した眼で待つてゐる。

ほんたうにお前は氣の毒なほど新らしい無智を食べてゐる。

やはらかい羊の皮のきものをきて

すずしい眼で御用をきいてゐる。

すこしはなまけてもいいよ、

すこしはあそんでもいいよ、

夜になつたらお前自身の考をゆるしてやる。

ぬけ羽のことさへわすれた老おいどり鳥が

お前のあたまのうへにびつこをひいてゐる。

のびてゆく不具

わたしはなんにもしらない。

ただぼんやりとすわつてゐる。

さうして、わたしのあたまが香のけむりのくゆるやうにわらわらとみだれてゐる。

あたまはじぶんから

あはうのやうにすべての物音に負かされてゐる。

かびのはえたやうなしめつぽい木霊こだまが

はりあひもなくはねかへつてゐる。

のぞみのない不具かたはめが

もうおれひとりといはぬばかりに

あたらしい生活のあとを食ひあらしめてゆく。

わたしはかうしてまいにちまいにち、

ふるい灰塚のなかへうもれてゐる。

神さまもみえない、

ふるへながら、のろのろしてゐる死をぬつたり消しぬつたり消ししてゐる。

### やけた鍵

だまつてゐてくれ、

おまへにこんなことをお願いするのは面目ないんだ。

この焼けてさびた鍵をそつともつてゆき、  
うぐひす色のしなやかな紙かみやすり鑢とにかけて、  
それからおまへの使ひなれた青砥あをとのうへにきずのつかないやうに  
おいてくれ。

べつに多分のねがひはない。

ね、さうやつてやけあとがきれいになほつたら、

またわたしの手へかへしてくれ、

それのもどるのを専念に待つてゐるのだから。

季節のすすむのがはやいので、

ついそのままにわすれてゐた。

としつきに焦こげたこのちひさな鍵かぎも

またつかひみちがわかるだらう。

### 美の遊行者

そのむかし、わたしの心にさわいだ野獣の嵐が、  
初夏の日にひややかによみがへつてきた。

すべての空想のあたらしい核たねをもとめようとして

南洋のながい髪をたれた女をんなどりのやうに、

いたましいほどに狂ひみだれたそのときのいちづつ一途の心が

いまもまた、このおだやかな遊行の日に法服をきた昔の知り人の

やうにやつてきた。

なんといふあてもない寂しさだらう。

白磁の皿にもられたこのみのやうに人を魅する冷たい哀愁がながれでる。

わたしはまことに美の遊行者であつた。

苗床のなかにめぐむ憂ひの芽<sup>め</sup>望みの芽、

わたしのゆくみちには常になしい雨がふる。

## 秋

ものはものを呼んでよろこび、

さみしい秋の黄色い葉はひろい おほやう 大様な胸にねむる。

風もあるし、旅人もあるし、

しづんでゆく若い心はほのかな化粧づかれに遠い国をおもふ。

ちひさな傷のあるわたしの手は

よろけながらに白い狼をおひかける。

ああ 秋よ、

秋はつめたい霧の火をまきちらす。

つんぼの犬

だまつて聴いてゐる、

あけはなした恐ろしい話を。

むくむくと太古を夢見てゐる犬よ、

顔をあげて流れさる潮の

はなやかな色にみとれてゐるのか。

お前の後足のほとりに、いつも

ミモザの花のにほひが漂うてゐる。

野の羊へ

野をひそひそとあゆんでゆく羊の群よ、

やさしげに湖上の夕月を眺めて

嘆息をもらすのは、

なんといいふ暝合をわたしの心にもつてくるだらう。

紫の角を持った羊のむれ、

跳ねよ、跳ねよ、

夕月はめぐみをこぼす……

わたし達すてられた魂のうへに。

## 威嚇者

わたしの威嚇者がおどろいてゐる梢の上から見おろして、  
いまにもその妙に曲つた固い黒い爪で

冥府から来た響の声援によりながら

必勝を期してわたしの魂へついてゐるだらう。

わたしはもう、それを恐れたり、おびえたりする余裕がない。

わたしは朦朧として無限とつらなつてゐるばかりで、

苦痛も慟哭も、哀れな世の不運も、抛りどころない風の苦痛にす  
ぎなくなつた。

わたしは、もう永遠の存在の端へむすびつけられたのだ。  
はし

わたしの生活の盛りは、空気をこえ、  
万象をこえ、水色の奥秘へひびく時である。

### 憂はわたしを護る

憂はわたしをまもる。

のびやかに此心がをどつてゆくときでも、

また限らない瞑想の朽廃へおちいるときでも、

きつと わたしの憂はわたしの弱い身体からだを中庸の微韻のうちに保

つ。

ああ お前よ、鳩の毛並のやうにやさしくふるへる憂よ、

さあ お前の好きな五月がきた。

たんぽぽの実のしろくはじけてとぶ五月がきた。

お前は この光のなかに悲しげに浴<sup>ゆあ</sup>みして

世界のすべてを包む恋を探せ。

河原の沙のなかから

河原の沙のなかから

夕映の花のなかへ むつくりとした円いものがうかびあがる。

それは貝でもない、また魚でもない、

胴からはなれて生きるわたしの首の幻だ。

わたしの首はたいへん年をとつて

ぶらぶらと落ちもない独りあるきがしたいのだらう。

やさしくそれを看<sup>み</sup>とりしてやるものもない。

わたしの首は たうとう風に追はれて、月見草のくさむらへまぎれこんだ。

## 仮面の上の草

そこをどいてゆけ。

あかい肉色の仮面のうへに生えた雑草は

びよびよとしてあちらのはうへなびいてゐる。

毒鳥の嘴くちばしにほじられ、

髪をながくのばした怪異の托僧は　こつねんとして姿をあらはした。

ぐるぐると身をうねらせる忍辱は

黒いながい舌をだして身ぶるひをする。

季節よ、人間よ、

おまへたちは横にたふれろ、

あやしい火はばうばうともえて、わたしの進路にたちふさがる。

そこをどいてゆけ、

わたしは神のしろい手をもとめるのだ。

香炉の秋

むらがる鳥よ、

むらがる木この葉よ、

ふかく、こんとんと冥護めいごの谷底へおちる。

あたまをあげよ、

さやさやとかける秋は　いましも伸びてきて、

おとろへた人人のために

音を<sup>ね</sup>うつやうな香炉をたく。

ああ 凋<sup>てうめつ</sup>滅のまへにさきだつこゑは

無窮の美をおびて境界をこえ、

白い木馬にまたがつてこともなくゆきすぎる。

### 創造の草笛

あなたはしづかにわたしのまはりをとりまいてゐる。

わたしが くらい底のない闇につきおとされて、

くるしきにもがくとき、

あなたのひかりがきらきらとかがやく。

わたしの手をひきだしてくるものは、

あなたの心のながれよりほかにはない。

朝露のやうにすずしい言葉をうむものは、

あなたの身ぶりよりほかにはない。

あなたは、いつもいつもあたらしい創造の草笛である。

水のおもてをかける草笛よ、

また とほくのはうへにげてゆく草笛よ、

しづかになさしくうたつてくれ。

## 球形の鬼

あつまるものをよせあつめ、

ぐわうぐわうと鳴るひとつの箱のなかに、

やうやく眼をあきかけた此世の鬼は

うすいあま皮かはに包まれたままでわづかに息いきをふいてゐる。

香具をもたらししてゆく虚妄の妖艶、

さんさんと鳴る銀と白蠟の燈架のうへのいのちは、

ひとしく手をたたいて消えんことをのぞんでゐる。

みよ、みよ、

世界をおしかくす赤いあかふくらんだ大足おほあしは

夕焼のごとく影をあらはさうとする。

ああ、ちからやみ力と闇きうけいとに満ちた球形おにの鬼よ、

その鳴りひびく胎期の長くあれ、長くあれ。

### ふくろふの笛

とびちがふ とびちがふ暗闇くらやみのぬけ羽ばの手、

その手は丘をひきよせてみだれる。

そしてまた 死の輪飾りを

薔薇のつぼみのやうなお前のやはらかい肩へおくるだらう。

おききなさい、

今も今とて　ふくろふの笛は足ずりをして

あをいけむりのなかにうなだれるお前のからだを

とほくへ　とほくへと追ひのける。

### くちなし色の車

つらなつてくる車のあとに　また車がある。

あをい<sup>せぼた</sup>背旗をたてならべ、

どこへゆくのをやら若い人たちがくるではないか、

しやりしやりと鳴るあらつちのうへを

うれひにのべられた小砂利こじやりのうへを

笑顔しながら羽ぶるひをする人たちがゆく。

さうして、くちなし色の車のかずが

河豚ふぐのやうな闇のなかにのまれた。

### 春のかなしみ

かなしみよ、

なんともいへない 深いふかい春のかなしみよ、

やせほそつた幹みきに春はたうとうふうはりした生きものかなしみを  
つけた。

のたりのたりした海原のはてしないとほくの方へゆくやうに

ああ このとめどもない悔恨のかなしみよ、

温室のなかに長いもすそをひく草のやうに

かなしみはよわよわしい頼たより気をなびかしてゐる。

空想の階段にうかぶ鳩の足どりに

かなしみはだんだんに虚無の宮殿にちかよつてゆく。

## 輝く城のなかへ

みなどを出る船は黄色い帆をあげて去つた。

くちばし  
嘴は木の葉の群をささやいて

海の鳥はけむりを焚いてゐる。

磯辺の草は亡霊の影をそだてて、

わきかへるうしほのなかへわたしは身をなげる。

わたしの身にからまる魚のうろこをぬいで、

泥土に輝く城のなかへ。

## 銀の足環

—— 死人の家をよみて ——

囚徒らの足にはまばゆい銀のくさりがついてゐる。

そのくさりの環くわんは しづかにけむる如く

呼吸をよび 嘆息をうながし、

力をはらむ鳥の翅つばさのやうにささやきを起して、

これら 憂愁にとざされた囚徒らのうへに光をなげる。

くらく いんうつに見える囚徒らの日常のくさむらをうごかすものは、

その、感觸のなつかしく 強靱なる銀の足環あしわである。

死滅のほそい途みちに心を向ける　これらバラツクのなかの人人は  
おそろしい空想家である。

彼等は精彩ある巢をつくり、雛ひなをつくり、  
海をわたつてとびゆく候鳥である。

### ひろがる肉体

わたしのこゑはほら貝のやうにとほくひろがる。

わたしはじぶんの腹をおさへてどしどしとあるくと、

日光は緋のきれのやうにとびちり、

空気はあをい胎壁たいへきの息のやうに泡をわきたたせる。

山や河や丘や野や、すべてひとつのけものとなつてわたしにつきしたがふ。

わたしの足は土となつてひろがり

わたしのからだは香にほひとなつてひろがる。

いろいろの法規は脣肉くづにくのやうにわたしのゑさとなる。

かくして、わたしはだんまりのほら貝のうちにかくれる。

つんぼの月、めくらの月、

わたしはまだ滅しつくさなかつた。

## 躁忙

ひややかな火のほとりをとぶ虫のやうに

くるくるといらだち、をののき、おびえつつ、さわがしい私よ  
野をかける仔牛のおどろき、

あかくもえあがる雲の真下に慟哭をつつんでかける毛なみのうつ  
くしい仔牛のむれ。

鉤<sup>はり</sup>を産む風は輝く宝石のごとく私をおさへてうごかさない。

底のない、幽谷の闇<sup>あけぼの</sup>の曙にめざめて偉大なる茫漠<sup>えな</sup>の胞衣をむかへ  
る。

つよい海風のやうに烈しい身づくろひした接吻をのぞんでも、

すべて手だてなきものは欺騙者の香餌である。

わたしの躁忙は海の底に

さわがしい太鼓をならしてゐる。

### 老人

わたしのそばへきて腰をかけた、

ほそい杖にたよつてそうつと腰をかけた。

老人はわたしの眼をみてゐた。

たつたひとつの光がわたしの背にふるへてゐた。

奇蹟のおそはれのやうに

わらひはじめると、

その口がばかにおほきい。

おだやかな日ひより和はながれ、

わたしの身がけむりになつてしまふかとおもふと、

老人は白いひげをはやした蟹のやうにみえた。

### 白い髯をはやした蟹

おまへはね、しろいひげをはやした蟹だよ、

なりが大きくなって、のさのさとよこばひをする。

幻影をしまつておくうねりまがつた迷宮のきざはしのまへに、  
何年といふことなくねころんでゐる。

さまざまな行列や旗じるしがお前のまへをとほつていつたけれど、  
そんなものには眼もくれないで、

おまへは自分ひとりの夢をむさぼりくつてゐる。

ふかい哄笑がおまへの全身をひたして、

それがだんだんしづんでゆき、

地軸のひとつの端はしにふれたとき、

むらさきの光をはなつ太陽が世界いちめんひろがった。

けれどもおまへはおなじやうにふくろふの羽ばたく昼にかくれて、

なまけくさつた手で風琴をひいてゐる。

みどりの狂人

そらをおしながせ、

みどりの狂人よ。

とどろきわたる ぼうしつ 嫉のいけすのなかにはねまはる羽はねのある魚は、

さかさまにつつたちあがつて、

齒をむきだしていがむ。

いけすはばさばさとゆれる、

魚は眼をたたいてとびださうとする。

風と雨との自由をもつ、ながいからだのみどりの狂人よ、

おまへのからだだが、むやみとほそくながくのびるのは、  
どうしたせぬのだ。

いや……魚がはねるのがきこえる。

おまへは、ありたけのちからをだして空をおしながしてしまへ。

よれからむ帆

ひとつは黄色い帆、

ひとつは赤い帆、

もうひとつはあをい帆だ。

その三つの帆はならんで、よれあひながら沖あひさしてすすむ。

それはとほく海のうへをゆくやうであるが、

じつはだんだん空のなかへまきあがつてゆくのだ。

うみ鳥のけたたましいさけびがそのあひだをとぶ。

これらの帆ぬのは、

人間の皮をはいでこしらへたものだから、

どうしても、内側へまきこんできて、

おひての風を布ぬのいつぱいにはらまないのだ。

よれからむ生いきがは皮の帆布は翕きふぜん然としてひとつの怪像となる。

## 死の行列

こころよく すきとほる死の透明なよそほひをしたものが  
さらりさらり なんのさはるおともなく、

地をひきずるおともなく、

けむりのうへを匍<sup>は</sup>ふ青いぬれ色のたましひのやうに  
しめつた唇をのがれのがれゆく。

## 名も知らない女へ

名も知らない女よ、

おまへの眼にはやさしい媚がとがつてゐる、  
そして その瞳は小魚のやうにはねてゐる、

おまへのやはらかな頬は

ふつくりとして色とにほひの住処、  
すみか

おまへのからだはすんなりとして  
手はいきものやうにうごめく。

名もしらない女よ、

おまへのわけた髪の毛は

うすぐらく、なやましく、

ゆふべの鐘のねのやうにわたしの心にまつはる。

「ねえおつかさん、

あたし足がかつたるくつてしやうがないわ」

わたしはまだそのこゑをおぼえてゐる。

うつくしい うつくしい名もしらない女よ

## 黄色い馬

そこからはかげがさし、

ゆふひは帯をといてねころぶ。

かるい羽のやうな耳は風にふるへて、

黄色い毛並けなみの馬は馬銜はみをかねで繫つながれてゐる。

そして、パンヤのやうにふはふはと舞らひたつ懶惰だは

その馬の繫木つなぎとなつてうづくまり、

しき藁わらのうへによこになれば、

しみでる汗は祈禱かての糧かてとなる。

朱の揺椅子

岡をのぼる人よ、

野をたどる人よ、

さてはまた、とびらをとぼとぼとたたく人よ

春のひかりがゆれてくるではないか。

わたしたちふたりは

朱と金との揺椅子ゆりいすのうへに身をのせて、

このベエルのやうなふんき気きとともに、かろくかろくゆれてみよう、

あの温室さうにさくふうりん草くさのくびのやうに。

## 法性のみち

わたしはきものをぬぎ、

じゆばんをぬいで、

りんごの實のやうなはだかになつて、

ひたすらにほふしやう法性ほふしやうのみちをもとめる。

わたしをわらふあざけりのこゑ、

わたしをわらふそしりのこゑ、

それはみなてる日にむされたうじむしのこゑである。

わたしのからだはほがらかにあけぼのへはしる。

わたしのあるいてゆく路のくさは

ひとつひとつをとめとなり、

手をのべてはわたしの足をだき、

唇をだしてはわたしの膝をなめる。

すずしくさびしい野辺のくさは、

うつくしいをとめとなつて豊麗なからだをわたしのまへにさしの  
べる。

わたしの青春はけものとなつてもえる。

## 金属の耳

わたしの耳は

金糸きんしのぬひはくにいろづいて、

鳩のにこ毛のやうな痛みをおぼえる。

わたしの耳は

うすぐろい妖鬼の足にふみにじられて、

石いし綿わたのやうにかけおちる。

わたしの耳は

祭壇のなかへおひいれられて、

そこに印呪をむすぶかなもの金物の像となつた。

わたしの耳は

水仙の風のなかにたつて、

物の招きにさからつてゐる。

## 妬心の花嫁

このころ、

つばさのはえた、角つのの生えたわたしの心は、

かぎりなくも温熱をんねつの胸きょう 牆きやうをもとめて、

ひたはしりにまよなかの闇をかける。

をんなたちの放埒はうちはこの右の手のかがみにうつり、

また疾走する吐息のかをりはこの左の手のつるぎをふるはせる。

妖気まじの美僧びそうはもすそをひいてことばをなげき、

うらうらとして銀鈴の魔をそよがせる。

ことなれる二つの性は大地のみごもりとなつて、

谷間に老樹らうじゆをうみ、

野や丘にはひあるく二尾ふたをの蛇をうむ。

### 蛙にのつた死の老爺

灰色の蛙の背中にのつた死が、

まづしいひげをそよがせながら、

そしてわらひながら、

手をさしまねいてやつてくる。

その手は夕暮をとぶ蝙蝠のやうだ。

年をとつた死は

蛙のあゆみののろいのを気にもしないで、

ふはふはとのつかつてゐる。

その蛙は横からみると金色きんいろにかがやいてゐる、

まへからみると二つの眼がとびでて黒くひかつてゐる。

死の顔はしろく、そして水色にすきとほつてゐる。

死の老爺おやぢはこんな風にして、ぐるりぐるりと世界のなかをめぐつ

てゐる。

## 日輪草

そらへのぼつてゆけ、

心のひまはり草よ、

きんきんと鈴をふりならす階段をのぼつて、

おほぞらの、あをいあをいなかへはひつてゆけ、

わたしの命は、そこに芽をふくだらう。

いまのわたしは、くるしいさびしい悪魔の繙わなにつつまれてゐる。

ひまはり草よ、

正直なひまはり草よ、

鈴のねをたよりにのぼつてゆけ、のぼつてゆけ、  
空をまふ魚うをのうろこの鏡は、  
やがておまへの姿をうつすだらう。

ふくらんだ宝玉

ある夕方、一疋のおほきな蝙蝠が、  
するどい叫びをだしてかけまはつた。  
茶と青磁との空は  
大口をあいてののしり、

おもい憎悪をしたたらし、

ふるい樹のうつろのやうに蝙蝠の叫びを抱きかかへた。

わたしは眺めると、

あなたこなたに、ふさふさとした神のしろい髪がたれてゐた。

幻影のやうにふくらんだ宝玉は、

水みづびる蛭のやうにうごめいて、

おたがひの身をすりつけた。

ふくらんだ宝玉はおひおひにわたしの脳をかたちづくつた。

足をみがく男

わたしは足をみがく男である。

誰のともしれない、しろいやはらかな足をみがいてゐる。

そのなめらかな甲の手ざはりは、

牡丹の花のやうにふつくりとしてゐる。

わたしのみがく桃色のうつくしい足のゆびは、

息のあるやうにうごいて、

わたしのふるへる手は涙をながしてゐる。

もう二度とかへらないわたしの思ひは、

ひばりのごとく、自由に自由にうたつてゐる。

わたしの生の祈りのともしびとなつてもえる見知らぬ足、

さわやかな風のなかに、いつまでもそのままにうごいてをれ。

むらがる手

空はかたちもなくくもり、

ことわりもないわたしのあたまのうへに、  
錨いかりをおろすやうにあまたの手がむらがりおりる。

街のなかを花とふりそそぐ亡霊のやうに、  
ひとしづくの胚はい珠しゆをやしなひそだてて、  
ほのかなる小径の香かをさがし、

もつれもつれる手の愛にわたしのあたまは野火のやうにもえたつ。  
 しなやかに、しろくすずしく身ぶるひをする手のむれは、  
 今わたしのあたまのなかの王座をしめて相<sup>さうかん</sup>姦する。

### 怪物

からだは翁<sup>おきな</sup>草<sup>なぐさ</sup>の髪のやうに亜麻色の毛におほはれ、  
 顔は三月の女<sup>をんな</sup>鴉<sup>からす</sup>のやうに憂鬱にしづみ、  
 四つの足ではひながらも  
 ときどきうすい爪でものをかきむしる。

そのけものは ひくくうめいて寝ころんだ。

曇天の日は銀のやうにつめたく火花をちらし、

けもののかたちは 黒くおそろしくなつて、

微風とともにかなたへあゆみさつた。

### 花をひらく立像

手をあはせていのります。

ものまねきはしづかにおとづれます。

かほもわかりません、

髪のけもわかりません、

いたいたしく、ひとむれのにほひを背おうて、

くらいゆふぐれの胸のまへに花びらをちらします。

### めくらの蛙

闇のなかに叫びを追ふものがあります。

それはめくらの蛙です。

ほのぼのとたましひのほころびを縫ふこゑがします。

あたまをあげるものは夜のさかづきです。<sup>よる</sup>

くちなし色の肉を盛<sup>も</sup>る夜のさかづきです。

それはなめらかにうたふ白磁のさかづきです。

蛙の足はびつこです。

蛙のおなかはやせてゐます。

蛙の眼はなみだにきずついてゐます。

つめたい春の憂鬱

にほひ袋をかくしてゐるやうな春の憂鬱よ、

なぜそんなに わたしのせなかをたたくのか、

うすむらさきのヒヤシンスのなかにひそむ憂鬱よ、

なぜそんなに わたしの胸をかきむしるのか、

ああ、あの好きなどもだちはわたしにそむかうとしてゐるではないか、

たんぽぽの穂のやうにみだれてくる春の憂鬱よ、

象牙のやうな手でしなをつくるやはらかな春の憂鬱よ、

わたしはくびをかしげて、おまへのするままにまかせてゐる。

つめたい春の憂鬱よ、

なめらかに芽生えのうへをそよいでは消えてゆく

かなしいかなしいおとづれ。

ヒヤシンスの唄

ヒヤシンス、ヒヤシンス、

四月になつて、わたしの眠りをさましてくれる石竹色のヒヤシンス、

氣高い貴公子のやうなおもぎしの青白色のヒヤシンスよ、

さては、なつかしい姉のやうにわたしの心を看みまもつてくれる紫のおほきいヒヤシンスよ、

とほくよりクレーム色に塗つた小馬車をひきよせる魔術師のヒヤ  
シンスよ、

そこには、白い魚のはねるやうな鈴が鳴る。

たましひをあたためる銀の鈴が鳴る。

わたしを追ひかけるヒヤシンスよ、

わたしはいつまでも、おまへの眼のまへに逃げてゆかう。

波のやうにとびはねるヒヤシンスよ、

しづかに物思ひにふけるヒヤシンスよ。

## 母韻の秋

ながれるものはさり、

ひびくものはうつり、

ささやきとねむりとの大きな花たばのほとりに

しろ毛のうさぎのやうにおどおどとうづくまり、

宝石のやうにきらめく眼をみはつて

わたしはかぎりなく大空のとびらをたたく。

## 湿気の小馬

かなしいではありませんか。

わたしはなんとしてもなみだがながれます。

あの　うすいうすい水色をした角をもつ、

小馬のやさしい背にのつて、

わたしは山しぎのやうにやせたからだをまかせてゐます。

わたしがいつも愛してゐるこの小馬は、

ちやうどわたしの心が、はてしないささめ雪のやうにながれてゆくとき、

どこからともなく、わたしのそばへやつてきます。

かなしみにそだてられた小馬の耳は、

うるきやう色のつゆにぬれ、

かなしみにつつまれた小馬の足は

やはらかな土壤の肌にねむつてゐる。

さうして、かなしみにさそはれる小馬のたてがみは、

おきなくさの髪の毛のやうにうかんでゐる。

かるいかるい、枯草のそよぎにも似る小馬のすすみは、

あの、ぱらぱらとうつ *Timbale* 《タンバアル》のふしのねにそぞろなみだぐむ。

森のうへの坊さん

坊さんがきたな、

くさいろのちひさなかごをさげて。

鳥のやうにとんできた。

ほんとに、まるで鴉からすのやうな坊さんだ、

なんかの前じらせをもつてくるやうな、ぞつとする坊さんだ。

わらつてゐるよ。

あのうすいくちびるのさきが、

わたしの心臓へささるやうな気がする。

坊さんはとんでいった。

をんなのはだかをならべたやうな

ばかにしろくみえる森のうへに、

ひらひらと紙のやうに坊さんはとんでいった。

草の葉を追ひかける眼

ふはふはうかんでゐる

くさのはを、

おひかけてゆくわたしのめ。

いつてみれば、そこにはなんにもない。

ひよりのなかにたつてゐるかげろふ。

おてらのかねのまねをする

のろいのろい風かぜあし。

ああ くらい秋だねえ、

わたしのまぶたに霧がしみてくる。

きれをくびにまいた死人

ふとつてゐて、

ぢつとつかれたやうにものをみつめてゐる顔、

そのかほもくびのまきものも、

すてられた果くだもの実のやうにもものうくしづまり、

くさかげろふのやうなうすあをい息にぬれてゐる。

ながれる風はとしをとり、

そのまぼろしは大きな淵にむかへられて、

いつとなくしづんでいった。

さうして あとには骨だつた黒いりんかくがのこつてゐる。

手のきずからこぼれる花

手のきずからは

みどりの花がこぼれおちる。

わたしのやはらかな手のすがたは物語をはじめ。

なまけものの風よ、

ものぐさなしのび雨よ、

しばらくのあひだ、

このまつしろなテエブルのまはりにすわつてゐてくれ、

わたしの手のきずからこぼれるみどりの花が、

みんなのひたひに心持よくあたるから。

## 年寄の馬

わたしは手でまねいた、

岡のうへにさびしくたつてゐる馬を、

岡のうへにないてゐる年寄の馬を。

けむりのやうにはびこる憂鬱、

はりねずみのやうに舞ふ苦悶、

まつかに焼けただれたたましひ、

わたしはむかうの岡のうへから、

やみつかれた年寄の馬をつれてこようとしてゐる。

やさしい老馬よ、

おまへの眼のなかにはあをいすゐきょう水草のかけがある。

そこに、まつしろなすきとほる手をさしのべて、

水草のかげをぬすまうとするものがゐる。

鼻を吹く化粧の魔女

水仙色のそら、

あたらしい智謀と靈魂とをそだてる暮<sup>くれ</sup>方<sup>がた</sup>の空のなかに、  
こころよく水色にもえる眼鏡、

その眼鏡にうつる向うのはうに

豊麗な肉体を持つ化粧の女、

しなやかに　ぴよぴよとなくやうな女のからだ、

ほそい　にははしい線のゆらめくたびに、

ぴよぴよとなまめくこゑの鳴くやうなからだ、

ねばねばしたまぼろしと

つめたくひかる放埒とが、

くつきりとからみついて、

あをくしなしなと透明にみえる女のからだ、

ものごしの媚びるにつれて、

ものかげの夜の鳥のやうに、

ぴよぴよと鳴くやうな女のからだ、

やさしいささやきを売る女の眼、

雨のやうに情念をけむらせる女の指、

闇のなかに高い香料をなげちらす女の足の爪、

濃化粧の魔女のはく息は、

ゆるやかに輪をつくつて、

わたしのつかれた眼をなぐさめる。

あをざめた僧形の薔薇の花

もえあがるやうにあでやかなほこりをつつみ、

うつうつとしてあゆみ、

うつうつとしてわらつてゐた

僧形そうぎやうのばらの花、

女の肌にながれる乳色のかげのやうに

うづくまり たたずみ うろうろとして、

とかげの尾のなるひびきにもにて、

おそろしいなまめきをひらめかしてうかがひよる。

すべてしろいもののなかに

かくれふしてゆく僧形そうぎやうのばらの花、

ただれる憂鬱、

くされ とけてながれる悩乱の花束、

美貌の情欲、

くろぐろとけむる叡智えいちの犬、

わたしの両手はくさりにつながれ、

ほそいうめきをたててゐる。

わたしのまへをとほるのは、

うつくしくあをざめた僧そうぎやう形のばらの花、

ひかりもなく つやもなく もくもくとして、

とほりすぎるあをざめたばらの花。

わたしのふたつの手は

くさりとともにさらさらと鳴つてゐる。

## 僧衣の犬

くちぶえのとほぎかる森のなかから、

はなすぢのとほつた

ひたひにしわのある犬が

のつそりとあるいてきた。

犬は人間の年寄のやうに眼をしめらせて、

ながい舌をぬるぬるとして物語つた。

この犬は、

その身にゆつくりとしたねずみいろの僧衣そういをつけてゐた。

犬がながい舌をだして話しかけると、

ゆるやかな僧衣のすそは閑かん子鳥こどりのはねのやうにぱたぱたした。

あかい あかい 火のやうな空のわらひ顔、  
僧衣の犬はひとこゑもほえないで黙つてゐた。

### 手の色の相

手の相は暴風雨あらしのきざはしのまへに、  
しづかに物語りをはじめる。

赤はうひごと、

黄はよろこびごと、

紫は知らぬ運動の転回、

青は希望のはなれるかたち、

さうして銀と黒との手の色は、

いつはりのない狂気の道すぢを語る。

空にかけのぼるのは銀とひわ色のまざつた色、

あぢさゐ色のぼやけた手は扉にたつ黄金の王者、

ふかくくぼんだ手のひらに、

星かげのやうなまだらを持つのは死の予言、

栗色の馬の毛のやうな艶つやつぽい手は、

あたらしい偽善ぎぜんに耽る人である。

ああ、

どこからともなくわたしをおびやかす

ふるへをののく青銅の鐘のこゑ。

鈴蘭の香料

みどりのくものなかにすむ魚うをのあしおと、

過去のとびらに名残ベエゼの接吻ベエゼをするみだれ髪、

うきあがる紫紺しこんのつばさ、

思ひにふける女をんなどり鳥はよろめいた。

まつさをな鉤かぎをひらめかし、

とほくたましひの宿をさそふ女をんなどり鳥、

もやもやとしたなやましいおまへの言葉の好ましき、

しろい月のやうにわたしのからだをとりまくおまへのことば、

霧のこい夏の夜よのけむりのやうに、

つよくつよくからみつくにほひ香のことばは、

わたしのからだにしなしなとふるへついでる。

### 香料の墓場

けむりのなかに、

霧のなかに、

うれひをなげすてる香料の墓場、

幻想をはらむ香料の墓場、

その墓場には鳥の生き羽いばねのやうに亡骸なきがらの言葉がにほつてゐる。

香料の肌のぬくみ、

香料の骨のきしめき、

香料の息のときめき、

香料のうぶ毛のなまめき、

香料の物言ひぶりのあだつぼさ、

香料の身振りのながしめ、

香料の髪かみのふくらみ、

香料の眼まなこにたまる有情うじやうの涙、

雨のやうにとつぷりと濡れた香料の墓場から、  
いろめくさまごまの姿はあらはれ、  
すたれゆく生物いきもののほのほはもえたち、  
出家した女の移り香をただよはせ、  
過去へとびさる小鳥の羽はねをつらぬく。

香料の顔寄せ

とびたつヒヤシンスの香料、  
おもくしづみゆく白ばらの香料、

うづをまくシネラリヤのくさつた香料、

夜のやみのなかにたちはだかるよる月下香テユベルウスの香料、

身にしみじみと思ひにふける伊太利の黒百合の香料、

はなやかな著物をぬぎすてるリラの香料、

泉のやうに涙をふりおとしてひざまづくチュウリップの香料、

年の若さにへんろ遍路の旅にたちまよふアマリリスの香料、

友もなくひとりびとりに恋にやせるアカシヤの香料、

記憶をおしのけて白いまぼろしの家をつくるシプレ糸杉の香料、

やさしい肌をほのめかして人の心をときめかす鈴蘭の香料。

## 舞ひあがる犬

その鼻をそろへ、

その肩をそろへ、

おうおうとひくいうなりごゑに身をしづませる二疋ひきの犬。

そのせはしい息をそろへ、

その眼は赤くいちごのやうにふくらみ、

さびしきにおうおうとふるへる二ひきの犬。

沼のぬくみのうちにほころびる水すゐさう草の肌のやうに、

なんといふなめらかさを持つてゐることだらう、

つやつやと月夜のやうにあかるい毛なみよ、

さびしさにくひしぼる犬は

おうおうとをのきなきさけんで、

ほの黄色い夕ゆふやみ闇のなかをまひあがるのだ。

しろい爪をそろへて、

ふたつの犬はよぢのぼる蔓つるくさ草のやうに

ほのきいろい夕闇の無言のなかへまひあがるのだ。

そのくるしみをかはしながら、

さだめない大空のなかへゆくふたつの犬よ、

やせた肩をごらん、

ほそいしつぽをごらん、

おまへたちもやつぱりたえまなく消えてゆくものの仲間だ。

ほのきいろい夕空のなかへ、

ふたつのものはくるしみをかはしながらのぼつてゆく。

### 林檎料理

手にとつてみれば

ゆめのやうにきえうせる淡雪<sup>あはゆき</sup>りんご、

ネルのきものにつつまれた女のはだのやうに

ふうはりともしあがる淡雪りんご、

舌のとけるやうにあまくねばねばとして

嫉妬のたのしい心持にも似た淡雪りんご、

まつしろい皿のうへに

うつくしくもられて泡をふき、

香水のしみこんだ銀のフォークのささるのを待つてゐる。

とびらをたたく風のおとのしめやかな晩、

さみしい秋の

林檎料理のなつかしさよ。

まるい鳥

をんなはまるい線をゑがいて

みどりのふえをならし、

をんなはまるい線をひいて

とりのはねをとばせる。

をんなはまるい線をふるはせて

あまいにがさをふりこぼす。

をんなは鳥だ、

をんなはまるい鳥だ。

だまつてゐながらも、

しじゅうなきごゑをにほはせる。

## 白い狼

白い狼が

わたしの背中でほえてゐる。

白い狼が

わたしの胸で、わたしの腹で、  
うをう うをうとほえてゐる。

こえふとつた白い狼が

わたしの腕で、わたしの股<sup>もも</sup>で、

ぼう ぼうとほえてゐる。

犬のやうにふとつた白い狼が

真赤な口をあいて、

なやましくほえさけびながら、

わたしのからだぢゆうをうろうろとあるいてゐる。

### 盲目の鴉

うすももいろの瑪瑙の香炉から

あやしくみなぎるけむりはたちのぼり、

かすかに迷ふ茶色の蛾は

そこに白い腹をみせてたふれ死ぬ。

秋はかうしてわたしたちの胸のなかへ

おともないとむらひのやうにやつてきた。

しろくわらふ秋のつめたいくもり日に、

めくら鴉がらすは枝から枝へ啼いてあるいていった。

裂かれたやうな眼がしらの鴉よ、

あぢさゐの花のやうにさまさまの雲をうつす鴉の眼よ、

くびられたやうに啼きだすお前のこゑは秋の木の葉こをさへちぢれ

させる。

お前のこゑのなかからは、

まつかなけしの花がとびだしてくる。

うすにごる青磁の皿のうへにもられた兎の肉をきれぎれに噛む心地にて、

お前のこゑはまぼろしの地面に生える雑草である。

羽根をひろげ、爪をかき、くちばしをさぐつて、

枝から枝へあるいてゆくめくら鴉は、

げえを げえを とおほごゑにしぼりないてゐる。

無限につながる闇の宮殿のなかに、

あをじろくほとばしるいなづまのやうに

めくら鴉のなきごゑは げえを げえを げえをとひびいてくる。

## 蜘蛛のをどり

あらあらしく野のをかに歩みをはこぶ

ゆふぐれのさびれたたましひのおともないはばたき、

うすぐらいともしびのゆらめくたのしさにも似て、

さそはれる微笑の釣針のうつくしき。

うちつける壁も扉も窓もなく、

むなしくあを空のふかみの底に身をなげ、

世紀のあをあをとながれるうれひ顔のうへに、

こともなげに、ひそかにも、

うつりゆく香料のたいまつをもやしつづけた。

いつびきの黄色い大蜘蛛は

手品のやうにするすると糸をたれて、

そのふしぎな心の運命さだめを織る。

ああ、

ゆふぐれの野のはてにひとりつぶやく太陽の

かなしくゆがんだわらひ顔、

黄色い蜘蛛はた・た・たと織りつづける。

女のやうにべつたりとしたおほきな蜘蛛は、

くたびれるのもしらないで、

足も 手も ぐるぐるする眼も

葉ずれの蘆のやうに、するどくするどくうごいてゐる。

## 指頭の妖怪

あをじろむ指のさきから、

小鳥がまひたつてゆく。

ぎらぎらにくもる地面の床とこのうへに、

片足でおとろへはてながら、

うづまきながらのしかかってくる。

まつくろな蛇の腹のやうな太鼓のおとが

ぼろんぼろんとなげくのだ。

わたしのあをじろむ指のさきからにげてゆく月夜の雨、

毛ばだつた秋の果物くだもののやうな

ふといぬめぬめとした頸くびをねぢらせ、

なまめく頸をねぢらせ、

秋のこゑをつぶやき、

秋のつめたさをおさへつける。

ぼろんぼろんとやぶれた魂の糸をかきならし、

熱く、ものうく、身をかきむしつて、

さびしい秋のつめたさをおさへつける。

まがりくねつた この秋のさびしさを、

あやしくふりむけるお前のなまなましい頸のうめきに、

たよりなくもとほざけるのだ。

しろくひかる粘液をひいて、

うねりをうつお前の頸に

なげつけられた言葉の世にも稀なにほひ。

ぼろんぼろんと

わたしの遠耳にきこえてくるあやしい太鼓のおと。

わかれることの寂しさ

あの人はわたしたちとわかれてゆきました。

わたしはあの人を別に好いても嫌つてもあつせんでした。

それなのに、

あの人があつたからにはなれてゆくのをみると、

あの人があつたやせた顔をもつて去つてゆくのをあつと、  
わけもないものさびしさが

あはくわたしの胸のそこにながれてゆきます。

人の世の　生きてわかれてゆくながれのさびしさ。

あの人のはのじろい顔も、

なじみの調度てうどのなかにもう見えなくなるのかと思ふと、

さだめなくあひ、さだめなくはなれ、

わづかのことばのうちゆふぐれのささやきをにこした

そのふしぎの時間は、

とほくきえてゆくわたしの足あとを、

鳥のはねのやうにはたはたと羽ばたきをさせるのです。

わらひのひらめき

あのしめやかなうれひにとざされた顔のなかから、

をりふしにこぼれでる

あはあはしいわらひのひらめき。

しろくうるほひのあるひらめき、

それは誰にこたへたわらひでせう。

きぬずれのおとのやうなひらめき、

それはだれをむかへるわらひでせう。

うれひにとぎされた顔のなかに咲きいでる

みづいろのともしびの花、

ふしめしたをとめよ、

あなたの肌のそよかぜは誰へふいてゆくのでせう。

夏の夜の薔薇

手に笑とささやきとの吹雪する夏の夜、<sup>よる</sup>

黒髪のみだれ心地の眼がよろよろとして、

うつさうとしげる森の身ごもりのやうにたふれる。

あたらしいされかうべのうへに、

ほそぼそとむらがりかかむらさきのばらの花びら、

夏の夜の銀色の 淫<sup>いんじゆう</sup> 縦<sup>ゆう</sup>をつらぬいて、

よろめきなされる薔薇の怪物。

みたまへ、

雪のやうにしろい腕こそは女王のばら、

まるく息づく<sup>トルス</sup>胸は黒い大輪のばら、

ふつくりとして指のたにまに媚をかくす足は鬱金<sup>うこん</sup>のばら、

ゆきずりに秘密をふきだすやはらかい肩は真赤まつかなばら、

帯のしたにむつくりともりあがる腹はあをい臨終のばら、

こつそりとひそかに匂ふすべすべしたつぼみのばら、

ひびきをうちだすただれた老女のばら、

舌と舌をつなぎあはせる絹のばらの花。

あたらしいふらふらするされかうべのうへに

むらむらとおそひかかるねずみいろの病気のばら、

香料の吐息をもらすばらの肉体よ、

芳香の淵にざわざわとおよぐばらの肉体よ、

いそげよ、いそげよ、

沈黙にいきづまる歡樂の祈祷にいそげよ。

## 木製の人魚

こゑはとほくをまねき、

しづかにべにの鳩をうなづかせ、

よれよれてのぼる火繩ひなはの秋をうつろにする。

こゑはさびしくぬけて、

うつろを見はり、

ながれる身のうへにほひをうつす。

くちびるはあをくもえて、

うみのまくらにねむり、

むらがりしづむ藻草もぐさのかげに眼をよせる。

### 洋装した十六の娘

そのやはらかなまるい肩は、

まだあをい水蜜桃のやうに媚こびの芽をふかないけれど、

すこしあせばんだうぶ毛がしろい肌にぴちやつとくつついてゐる

やうすは、

なんだか、かんで食べたいやうな不思議なあまい食欲をそそる。

#### 十四のをとめ

そのすがたからは空色のみづがながれ、

きよらかな、ものを吸ふやうな眼、

けだかい鼻、

つゆをやどしてゐるやうなときいろの頬、

あまい睡をためてゐるちひさい唇。

黄金きんのランプのやうに、

あなたのひかりはやはらかにもえてゐる。

椅子に眠る憂鬱

はればれとその深い影をもつた横顔を

花鉢はなばちのやうにしづかにとどめ、

揺椅子ゆりいすのなかにうづくまる移り気をそそのかして、

死のすがたをおぼろにする。

みどりいろの、ゆふべの揺椅子のなやましさに、

みじかい<sup>せい</sup>生の花粉のさかづきをのみほすのか。

ああ、わたしのほとりに<sup>は</sup>匍ひよるみどりの椅子のささやきの小唄、  
憂鬱はながれる魚の<sup>うを</sup>かなしみにも似て、ゆれながら、ゆれながら、  
かなしみのさざなみをくりかへす。

### まぼろしの薔薇

はるはきたけれど、

わたしはさびしい。

ひとつのかげのうへにまたおもいかげがかさなり、

わたしのまぼろしのばらをさへぎる。

ふえのやうなほそい声でうたをうたふばらよ、

うつくしい悩みのたねをまくみどりのおびのしろばらよ、

うすぐもりした春のこみちに、

ばらよ、ばらよ、まぼろしのしろばらよ、

わたしはむなしくおまへのかげをもとめては、

こころもなくさまよひあるくのです。

\*

かすかなはくてう白鳥のはねのやうに

まよなかにさきつづく白ばらの花、

わたしのあはせた手のなかに咲きいでるまぼろしの花、

さきつづくにほひの白ばらよ、

こころをこめたいのりのなかに咲きいでるほのかなばらよ、

ああ、なやみのなかにさきつづく

にほひのばらよ、にほひのばらよ、

おまへのながいまつげが

わたしをさしまねく。

\*

まつしろいほのほのなかに、

おまへはうつくしい眼をとちてわたしをさそふ。

ゆふぐれのみちにかみでるしろばらよ、

うすやみにうかみでるみどりのおびのしろばらよ、

おまへはにほやかな眼をとちて、

わたしのさびしいむねに花をひらく。

\*

なやましくふりつもるこころのおくの薔薇ばらの花よ、

わたしはかくすけれども、

よるのふけるにつれてまざまざとうかみでるかなしいしろばらの  
花よ、

さまざまのおもひをこめたおまへの秘密のかほが、

みづのなかの月のやうに

はてしのないながれのなかにうかんでくる。

\*

ひとひら、またひとひら、ふくらみかけるつぼみのばらのはな、  
そのままに、ゆふべのこゑをにははせるばらのかなしみ、

ただ、まぼろしのなかへながれてゆくわたしのしろばらの花よ、

おまへのまつしろいほほに、

わたしはさびしいこほろぎのなくのをききます。

\*

ゆふぐれのかげのなかをあるいてゆくしめやかなこひびとよ、

こゑのないことばをわたしのむねにのこしていつた白薔薇の花よ、  
うすあをいまぼろしのぬれてゐるなかに

ふたりのくちびるがふれあふたふとさ。

ひごとにあたらしくうまれでるあの日のばらのはな、

つめたいけれど、

ひとすぢのゆくへをたづねるころは、  
おもひでの籠かごをさげてゆきます。

薔薇のものものけ

あさとなく ひるとなく よるとなく  
わたしのまはりにうごいてゐる薔薇のものものけ、  
おまへはみどりのおびをしゆうしゆうとならしてわたしの心をし  
ばり、

うつりゆくわたしのからだに、

たえまない火のあめをふらすのです。

手をのばす薔薇

ばらよ おまへはわたしのあたまのなかで鴉のやうにゆれてゐる。

ふしぎなあまいこゑをたててのどをからす野鳩のやうに

おまへはわたしの思ひのなかでたはむれてゐる。

はねをなくした駒鳥のやうに

おまへは影かげをよみながらあるいてゐる。

このやうにさびしく　ゆふぐれとよるとのくるたびに  
わたしの白薔薇の花はいきいきとおとづれてくるのです。

みどりのおびをしめて　まぼろしによみがへつてくる白薔薇の花、  
おまへのすがたは生きた宝石の蛇、

かつ　かつ　かつととほいひづめのおとをつたへるおまへのゆめ、  
薔薇はまよなかの手をわたしへのばさうとして、  
ぼたりぼたりちつていった。

### 薔薇の誘惑

ただひとつのにほひとなつて

わたり鳥のやうにうまれてくる影のばらの花、

糸をつないで墓<sup>ぼじやう</sup>上の霧をひきよせる影のばらの花、

むねせまく ふしぎなふるい甕<sup>かめ</sup>のすがたをのこしてゆくばらの  
な、

ものをいはないばらのな、

ああ

まぼろしに人間のたましひをたべて生きてゆくばらのな、

おまへのねばる手は雑草の笛にかくれて

あたらしいみちにくづれてゆきます。

ばらよ ばらよ

あやしい白薔薇のかぎりないこひしさよ。

悲しみの枝に咲く夢

こひびとよ、こひびとよ、

あなたの呼吸いきは

わたしの耳に青サファイヤ玉イルの耳かざりを見つけました。

わたしは耳がかゆくなりました。

こひびとよ、こひびとよ、

あなたの眼が星のやうにきれいだつたので、

わたしはいくつもいくつもひろつてゆきました。

さうして、わたしはあなたの眼をいつぱい胸にためてしまひました。

こひびとよ、こひびとよ、

あなたのびろうどのやうな小指がむづむづとうごいて、

わたしの鼻にさりました。

わたしはそのまま死んでもいいやうなやすらかな心持になりました。

## 風のなかに巣をくふ小鳥

——十月の恋人に捧ぐ——

あなたをはじめてみたときに、

わたしはそよ風にふかれたやうになりました。

ふたたび　みたび　あなたをみたときに、

わたしは花のつぶてをなげられたやうに

たのしさにほほえまずにはゐられませんでした。

あなたにあひ、あなたにわかれ、

おなじ日のいくにちもつづくとき、

わたしはかなしみにしづむやうになりました。

まことにはかなきものはゆくへさだめぬものおもひ、

風のなかに巢をくふ小鳥、

はてしなく鳴きつづけ、鳴きつづけ、

いづこともなくながれゆくこひごころ。

## 足

うすいこさめのふる日です、

わたしのまへにふたりのむすめがゆきました。

そのひとりのむすめのしろい足のうつくしさをわたしはわすれな  
い。

せいじいろの爪つまかはからこぼれてゐるまるいなめらかなかとは、  
ほんのりとあからんで、

はるのひのさくらの花びらのやうになまめいてゐました。

こいえびちやのはなをがそのはなびらをつつんでつやつやとして  
ゐました。

ああ うすいこさめのふる日です。

あはい春のこころのやうなうつくしい足のゆらめきが、

ぬれたしろい水みづ鳥どりのやうに

おもひのなかにかろくうかんでゐます。

恋人を抱く空想

ちひさな風がゆく、

ちひさな風がゆく、

おまへの眼をすべり、

おまへのゆびのあひだをすべり、

しろいカナリヤのやうに

おまへの乳房のうへをすべりすべり、

ちひさな風がゆく。

ひな菊と さくらさうと あをいばらの花とがもつれもつれ、

おまへのまるい肩があらしのやうにこまかにこまかにふるへる。

### 西藏のちひさな鐘

むらさきのつばきの花をぬりこめて、

かの宗門のよはひのみぞにはなやかなともしびをかかげ、

憂愁のやせさらばへた馬の背にうたたねする鐘よ、

そのほのぐらい銀色のつめたさは

さやさやとうすじろく、うすあをく、

嵐らんき気にかくされた その風貌の刺とげのなまなましき。

鐘は僧形のあしのうらに疑問のいぼをうゑ、

くまどりをおしせまり、

笹の葉のとぐろをまいて、

わかれてもわかれてもつきせぬきづなの魚うをを生かす。

### さびしいかげ

この ひたすらにうらさびしいかげはどこからくるのか、

きいろい木の実のみのるとほい未来の木立のなかからか、  
ちやうど 胸のさやさやとしたながれのなかに、  
すずしげにおよぐしろい魚のやうである。

あなたのごゑ

わたしの耳はあなたのごゑのうらもおもてもしつてゐる。  
みづ苔こけのうへをすべる朝のそよかぜのやうなあなたのごゑも、  
グロキシニヤのうぶげのなかにからまる夢のやうなあなたのごゑ  
も、

つめたい真珠のたまをふれあはせて靄もやのなかにきくやうなあなた

のこゑも、

銀ぎんと黄金こがねの太刀たちをひらひらとひらめかす幻想の太陽のやうなあな

たのこゑも、

月をかくれ、

沼の水をかくれ、

水中のいきものをかくれ、

ひとりけぎやかに雪のみねをのぼるやうな澄んだあなたのこゑも、

つばきの花やひなげしの花がほとほとおちるやうなひかりある

あなたのこゑも、

うすものレースでわたしのたましひをやはらかくとりまくあな

たのこゑも、

まひあがり、さてしづかにおりたつて、

あたりに気をかねながらささやく河原のなかの雲雀ひばりのやうなあなたのこゑも、

わたしはよくよく知つてゐる。

とほくのはうからにほふやうにながれてくるあなたのこゑのうつりかを、

わたしは夜のさびしさに、さびしさに、

いま、あなたのこゑをいくつもいくつもおもひだしてゐる。

## 盲目の宝石商人

わたしは十二月のきりのこいばんがたに、

街のなかをとぼろとぼろとあるいてゆくめくらの商人あきんどです。

わたしの手もやはり霧のやうにあをくばうばうとのびてゆくので  
す。

ゆめのおもみのやうなきぎはしがとびかひ、

わたしは手提の革箱かはばこのなかに、

ぬめいろのトルコ玉をもち、

蛇の眼のやうなトルマリン、

おほきなひびきを人形師の糸でころがすザクロ石、

はなよめのやはらかい指にふきはしいうすむらさきのうすダイヤ、  
わたしは空からおりてきた鉤かぎのやうに、

つつまれた柳のほそい枝のかげにわれながら  
まだらにうかぶ月の輪をめあてに、

さても とぼろとぼろとあるいてゆきます。

### 十六歳の少年の顔

—— 思ひ出の自画像 ——

うすあをいかげにつつまれたおまへのかほには

五月のほととぎすがないてゐます。

うすあをいびろうどのやうなおまへのかほには

月のにほひがひたひたとしてゐます。

ああ みればみるほど薄<sup>うすづき</sup>月のやうな少年よ、

しろい野芥子<sup>のげし</sup>のやうにはにかんでばかりゐる少年よ、

そつと指でさはられても真赤になるおまへのかほ、

ほそい眉、

きれのながい眼のあかるさ、

ふつくらとしてしろい頬の花、

水草<sup>みづくさ</sup>のやうなやはらかいくちびる、

はづかしさと夢とひかりとでしなしなとふるへてゐるおまへのか

ほ。

雪のある国へ帰るお前は

風のやうにおまへはわたしをとほりすぎた。

枝にからまる風のやうに、

葉のなかに真夜中をねむる風のやうに、

みしらぬおまへがわたしの心のなかを風のやうにとほりすぎた。

四月だといふのにまだ雪の深い北ほつく国へかへるおまへは、

どんなにさむぎむとしたよそほひをしてゆくだらう。

みしらぬお前がいつとはなしにわたしの心のうへにちらした花びらは、

きえるかもしれない、きえるかもしれない。

けれども、おまへのいたいけな心づくしは、

とほい鐘のねのやうにいつまでもわたしをなぐさめてくれるだらう。

### 焦心のながしめ

むらがりにはあをいひかりをよび、

きえがてにゆれるほのほをうづめ、

しろく しろく あゆみゆくこのさびしさ。

みづのおもての花でもなく、

また こずゑのゆふぐれにかかる鳥のあしおとでもなく、

うつろから うつろへとはこばれる焦心せうしんのながしめ、

鬱金香うつくこんかうの花ちりちりと、

こころは 雪をいただき、

こころは みぞれになやみ、

こころは あげがたの細雨ほそあめにまよふ。

四月の顔

ひかりはそのいろどりをのがれて、

あしおともかろく

かぎろひをうみつつ、

河のほとりにはねをのばす。

四月の顔はやはらかく、

またはぢらひのうちに溶とけながら

あらあらしくみだれて、

つぼみの花の裂さけるおとをつらねてゆく。

こゑよ、

四月のあらあらしいこゑよ、

みだれても みだれても

やはらかいおまへの顔は

うすい絹のおもてにうつる青い蝶蝶の群れ咲き

### 季節の色

たふれようとしてたふれない

ゆるやかに

葉と葉とのあひだをながれるもの、

もののみわけもつかないほど

のどかにしなしなとして

おもてをなでるもの、

手のなかをすべりでる

かよわいもの、

いそいそとして水にたはむれる風の舌、

みづいろであり、

みどりであり、

そらいろであり、

さうして 絶えることのない遥かな銀の色である。

わたしの身はうごく、

うつりゆくいろあひのなかに。

### 四月の日

日は照る、

日は照る、

四月の日はほのほのむれのやうに

はてしなく大空のむなしさのなかに

みなぎりあふれてゐます。

花は熱気へのぼせて、

うはごとを言ひます。

傘のやうに日のゆれる軟風なんふうはたちはだかり、  
とびあがる光の槍をむかへます。

日は照る、

日は照る、

あらあらしく紺こんじやう青の布をさいて、

らんまんと日は照りつづけます。

月に照らされる年齢

あめいろにいろどられた月光のふもとに

ことばをさしのべて空想の馬にさやぐものは、

わきたつ無数のともしびをてらして ひそみにかくれ、

闇のゆらめく舟をおさへて

ふくらむ心の花をゆたかにこぼさせる。

かはりゆき、うつりゆき、

つらなりゆき、

まことに ひそやかに 月のながれに生きる年頃。

月をあさる花

そのこゑはなめらかな砂のうへをはしる水貝みづがひのささやき、  
したたるものはまだらのかげをつくつてけぶりたち、

はなびらをはがしてなげうち、

身をそしり、

ほのじろくあへぐ指環ゆびわのなかに

かすみゆく月をとらへようとす。

ひらいてゆけよ、

ひとり ものかげにくちびるをぬらす花よ。

しろいものにあこがれる

このひごろの心のすずしさに

わたしは あまたのしろいものにあこがれる。

あをぞらにすみわたつて

おほどかにかかる太陽のしろいひかり、

蘆のはかげにきらめくつゆ、

すがたとなく かげともなく うかびでる思ひのなかのしろい花

ざかり、

熱情のさりはてたこずゑのうらのしろい花、

また あつたかいしろい雪のかほ、

すみしきる十三のをとめのこころ、

くづれても なほたはむれおきあがる青春のみどりのしろさ、

四月の夜の月のほほゑみ、

ほのあかい紅べにをふくんだ初恋のむねのときめき、

おしろいのうつくしい鼻のほのじろさ ほのあをさ、

くらがりにはひでる美妙びめうな指のなまめかしい息のほめき、

たわわなふくらみをもち ともしびにあへぐあかしや色の乳房の

花、

たふれてはながれみじろぐねやの秘密のあけぼののあをいいろ、

さみだれに ちらちらするをんなのしろくにほふ足。

それよりも 寺院のなかにあふれる木蓮もくれんの花の肉、

それよりも 色のない こゑのない かたちのない こころのむなしさ、

やすみをもとめないで けむりのやうにたえることなく生まれでる肌のうつりぎ、

月はしどろにわれて生物いきものをつつみそだてる。

夢をうむ五月

粉こをふいたやうな みづみづとしたみどりの葉つば、

あをぎりであり、かへでであり、さくらであり、

やなぎであり、すぎであり、いてふである。

うこんいろにそめられたくさむらであり、

まぼろしの花を咲かせる昼のほひであり、

感情の糸にゆたゆたとする夢の餌えをつける五月、

ただよふものは　ときめきであり　ためいきであり　かげのさし

ひきであり、

ほころびとけてゆく香料の波である。

思ひと思ひとはひしめき、

はなれた手と手とは眼をかはし、

もすそになびいてきえる花粉の蝶、

人人も花であり、樹樹も花であり、草草も花であり、

うかび　ながれ　とどまつて息づく花と花とのながしめ、  
もつれあひ　からみあひ　くるしみに上気する　むらさきのみだ  
れ花、

こゑはあまく　羽ばたきはとけるやうに耳をうち、

肌のひかりはぬれてふるへる朝のぼたんのやうにあやふく、

こころはほどのよい湿りにおそはれてよろめき、

みちもなく　ただ　そよいでくるあまいこゑにいだかれ、

みどりの泡をもつ　このすがすがしいはかない幸福、

ななめにかたむいて散らうともしない迷ひのそぞろあるき、

恐れとなやみとの網にかけられて身をほそらせる微風の卵。

## 蒼から蒼へあるいてゆく人

まだ ところをあかさない

とほいむかうにある恋人のこゑをきいてみると、

ゆらゆらする うすあかいつぼみの花を

ひとつひとつ あやぶみながらあるいてゆくやうです。

その花の

ひとの手にひらかれるのをおそれながら、

かすかな ゆくすゑのほひをおもひながら、

やはらかにみがかれたしろい足で

そのあたりをあるいてゆくのです。

ゆふやみの花と花とのあひだに

こなをまきちらす花はな蜂はちのやうに

あなたのみづみづしいこゑにぬれまみれて、  
ねむり心地ごこちにあるいてゆくのです。

## 六月の雨

六月はこもるあめ、くさいろのあめ、

なめくぢいろのあめ、

ひかりをおほひかくして窓のなかまじに息をはくねずみいろのあめ、  
しろい顔をぬらして みちにたたずむひとのあり、

たぎりたつ思ひをふさぐぬかのあめ、みみずのあめ、たれぬの  
あめ、

たえまないをやみのあめのいと、

もののくされであり、やまひであり、うまれである この霖なが雨あめ  
のあし、

わたしはからだの眼といふ眼をふさいでひきこもり、  
うぶ毛の月のほとりにふらふらとまよひでる。

卵の月

そよかぜよ　そよかぜよ、

わたしはあをいはねの鳥、

みづはながれ、

そよかぜはむねをあたためる。

この　しつとりとした六月の日は

ものをふくらめ　こころよくたたき、

まつしろい卵をうむ。

そよかぜのしめつたかほも

なつかしく心をおかし、

まつしろい卵のはだのなめらかなかがやき、

卵よ 卵よ

あをいはねをふるはして卵をながめる鳥、

まつしろ 卵よ ふくらめ ふくらめ、

はれた日に その肌をひらひらとふくらませよ。

### 春の日の女のゆび

この ぬるぬるとした空気のゆめのなかに、  
かずかずのをんなの指といふ指は

よろこびにふるへながら かすかにしめりつつ、

ほのかにあせばんでしづまり、

しろい ちやうじさう 丁字草のにほひをかくして のがれゆき、

ときめく波のやうに おびえる死人の薔薇をあらはにする。

それは みづからでた魚うをのやうにぬれて なまめかしくひかり、

ところどころに眼をあけて ほのめきをむさぼる。

ゆびよ ゆびよ 春のひのゆびよ、

おまへは ふたたびみづにいらうとする魚うをである。

## 黄色い接吻

もう わすれてしまった

葉かげのしげりにひそんでゐる

なめらかなかげをのぞかう。

なんといふことなしに

あたりのものが うねうねとした宵でした。

をんなは しろいきもののやうにむづむづしてゐました。

わたしのくちびるが

<sup>うを</sup>  
魚のやうに

はを はを はを はを はを

それは それは

あかるく きいろい接吻でありました。

頸をくくられる者の歎び

指をおもうてゐるわたしは

ふるへる わたしの髪の毛をたかくよぢのぼらせて、

げらげらする くわいてう 怪鳥 ねごゑ の寝声をまねきよせる。

ふくふくと なほしめやかに香気をふくんで霧のやうにいきりた  
つ

あなたの ゆびのなぐさみのために、

この 月の沼によどむやうな わたしのほのじろい頸をしめくく  
つてください。

わたしは 吐息といきに吐息をかさねて、

あなたのまぼろしのまへに さまざまの死のすがたをゆめみる。

あつたかい ゆらゆらする蛇のやうに なめらかに やさしく

あなたの美しい指で わたしの頸をめぐらしてください。

わたしの頸は 幽霊船いうれいぶねのやうにのたりのたりとして とほざか  
り、

あなたの きよらかなたましひのなかにかくれる。

日毎に そのはれやかに陰気な指をわたしにたはむれる

さかりの花のやうにまぶしく あたらしい恋人よ、

わたしの頸に あなたの うれはしいおぼろの指をまいてくださ  
い。

死は羽団扇のやうに

この夜の<sup>よる</sup> もうろうとした  
みえざる さつさつとした雨のあしのゆくへに、  
わたしは おとろへくづれる肉身の  
あまい怖ろしさをおぼえる。

この のぞみのない恋の毒草の火に

心のほのほは 日に日にもえつくされ、

よろこばしい死は

にほひのやうに その透明なすがたをほのめかす。

ああ ゆたかな 波のやうにそよめいてゐる やすらかな死よ、  
なにごともなく しづかに わたしのそばへ やつてきてくれ。

いまは もう なつかしい死のおとづれは

はうち羽団扇のやうにあたたかく わたしのうしろに ゆらめいてゐる。

雪が待つてゐる

そこには雪がまつてゐる、

そこには青い透明な雪が待つてゐる、

みえない刃をならべて

ほのほのやうに輝いてゐる。

船だねえ、

雪のびらびらした顔の船だねえ、

さういふものが、

いつたりきたりしてうごいてゐるのだ。

だれかの顔がだんだんのびてきたらしい。

髪

おまへのやはらかい髪の手は

ひるの月である。

ものにおくれる はぢらひをつつみ、

ちひさな さざめきをふくみ、

あかるいことばに 霧をまとうてゐる。

おまへのやはらかい髪の手は、

そらにきえようとする ひるの月である。

## 夕暮の会話

おまへは とほくから わたしにはなしかける、

この うすあかりに、

この そよともしない風のながれの淵に。

こひびとよ、

おまへは ゆめのやうに わたしにはなしかける、

しなだれた花のつぼみのやうに

にほひのふかい ほのかなことばを、

ながれぼしのやうに きらめくことばを。

こひびとよ、

おまへは いつも ゆれながら、

ゆふぐれのうすあかりに

わたしとともに ささめきはす。

### 道化服を着た骸骨

この 槍やりぶすま 衾やま のやうな寂しさを のめのめとはびこらせて

地面のなかに ふしころび、

野獸のやうにもがき　つきやぶり　わめき　をののいて

颯爽としてぎらぎらと化粧する　わたしの艶麗な死のながしめよ、

ゆたかな　あをめく　しかも純白の

さてはだんだら縞の道化服を着た　わたしの骸骨よ、

この人間の花に満ちあふれた夕暮に

いつぴきの孕はらんだ蝙蝠のやうに

ばさばさと　あるいてゆかうか。

## あをい馬

なにかしら とほくにあるもののすがたを

ひるもゆめみながら わたしはのぞんでゐる。

それは

ひとひらの芙蓉の花のやうでもあり、

ながれゆく空の 雲のやうでもあり、

わたしの身を うしろからつきうごかす

よわよわしい しのびがたいちからのやうでもある。

さうして 不安から不安へと、

砂原のなかをたどつてゆく

わたしは いつぴきをあをい馬ではないだらうか。

## 青い吹雪がふかうとも

おまへのそばに あをい吹雪がふかうとも

おまへの足は ひかりのやうにきらめく。

わたしの眼にしみいるかげは

二月のかぜのなかに実<sup>み</sup>をむすび、

生涯のをかのうへに いきながらのこゑをうつす。

そのこゑのさりゆくかたは

そのこゑのさりゆくかたは、

ただしらく いのりのなかにしづむ。

朝の波

——伊豆山にて——

なにかしら ぬれてゐるところで

わたしは とほい波と波とのなかにさまよひ、

もりあがる ひかりのはてなさにおぼれてゐる。

まぶしいさざなみの草、

おもひの縁ふちに くづれてくる ひかりのどよもし、

おほうなばらは おほどかに

わたしのむねに　ひかりのはねをたたいてゐる。

### 白い階段

かげは　わたしの身をさらず、

くさむらにうつらふ　足<sup>あしながぼち</sup>長蜂の羽<sup>はなり</sup>鳴のやうに、

火をつくり　ほのほをつくり、

また　うたたねのとほいしとねをつくり、

やすみなくながれながれて、

わたしのころのうへに、

しろいきぎはしをつくる。

しろい火の姿

わたしは 日のはなのなかにある。

わたしは おもひもなく こともなく 時のながれにしたがつて、  
とほい あなたのことにおぼれてゐる。

あるときは ややうすらぐやうにおもふけれど、

それは とほりゆく 昨日きのふのけはひで、

まことは いつの世に消えるともない

たましひから たましひへ つながつてゆく  
しろい しろい 火のすがたである。

みづいろの風よ

かぜよ、

しやうりん  
松 林 をぬけてくる 五月の風よ、

うすみどりの風よ、

そよかぜよ、そよかぜよ、ねむりの風よ、

わたしの髪を なよなよとする風よ、

わたしの手を わたしの足を

そして夢におぼれるわたしの心を

みづいろの ひかりのなかに 覚さまさせる風よ、

かなしみとさびしさを

ひとつひとつに消してゆく風よ、

やはらかい うまれたばかりの銀色の風よ、

かぜよ、かぜよ、

かろくうづまく さやさやとした海辺の風よ、

風はおまへの手のやうに しろく つめたく

薔薇の花びらのかげのやうに ふくよかに

ゆれてゐる ゆれてゐる、

わたしの あはいまどろみのうへに。

睫毛のなかの微風

そよかぜよ、

こゑをしのんでくる そよかぜよ、

ひそかのささやきにも似た にほひをうつす そよかぜよ、

とほく 旅路のおもひをかよはせる そよかぜよ、

しろい 子鳩の羽はねのなかにひそむ そよかぜよ、

まつ毛のなかに 思ひでの日をかたる そよかぜよ、

そよかぜよ、そよかぜよ、ひかりの風よ、そよかぜは  
 胸のなかにひらく 今日けふの花 昨日きのふの花 明日あしたの花。

そよぐ幻影

あなたは ひかりのなかに さうらうとしてよろめく花、  
 あなたは はてしなくもりゆく こゑのなかのひとつの魚うを、  
 こころを したたらし、  
 ことばを おぼろに けはひして、  
 あをく かるがると ゆめをかさねる。

あなたは みづのうへに うかび ながれつつ  
ゆふぐれの とほいしづけさをよぶ。

あなたは すがたのない うみのもしび、

あなたは たえまなく うまれでる 生涯の花しべ、

あなたは みえ、

あなたは かくれ、

あなたは よろよろとして わたしの心のなかに 咲きにほふ。

みづいろの あをいまぼろしの あゆみくるとき、

わたしは そこともなく ただよひ、

ふかぶかとして　ゆめにおぼれる。

ふりしきる　ささめゆきのやうに

わたしのこころは　ながれ　ながれて、

ほのぼのと　死のくちびるのうへに　たはむれる。

あなたは　みちもなくゆきかふ　むらむらとしたかげ、

かげは　にほやかに　もつれ、

かげは　やさしく　ふきみだれる。

薔薇の散策

1

地上のかけをふかめて、昏昏とねむる薔薇の唇。

2

白熱の俎上にをどる薔薇、薔薇、薔薇。

3

しろくなよなよとひらく、あけがた色の  
勤ごんぎやう行ぎやうの薔薇の花。

4

刺とげをかさね、刺とげをかさね、  
いよいよに  
にほひをそだてる薔薇の  
花。

5

翅つばさのおとを聴かんとして

水みづ鏡かがみする

喪さうしん心の  
あゆみゆく

薔薇

6

ひひらぎの葉はのねむるやうに　ゆめをおひかける  
霧きり色いろの薔薇  
の花。

7

いらくさの影かげにかこまれ　茫茫とした色をぬけでる　真珠色の薔  
薇の花。

8

黙禱の禁忌のなかにさきいでる  
形<sup>かたち</sup>なき蒼白の  
法<sup>ほつたい</sup>体の薔薇の  
花。

9

鬱金色の月に釣られる  
盲目の  
ただよへる薔薇。

10

ひそまりしづむ木立こだちに 鐘をこもらせるうすゆきいろの薔薇の花。

## 11

すぎさりし月光にみなぎる 雨の薔薇の花。

## 12

吐息をひらかせる ゆふぐれの 喘あへぎの薔薇の花。

## 13

ひねもすを嗟嘆する 南の色の薔薇の花。

14

火のなかにたはむれる 真昼の靴をはいた黒耀石の薔薇の花。

15

くもり日の顔びに映る 大空の窗まどの薔薇の花。

16

掌<sup>て</sup>はみづにかくれ

微<sup>そよ</sup>風<sup>かぜ</sup>の夢をゆめみる

未<sup>み</sup>生<sup>しやう</sup>の薔薇の花。

17

鷺毛<sup>がもう</sup>のやうにゆききする 風にさそはれて 朝<sup>あさ</sup>化<sup>げ</sup>粧<sup>しやう</sup>する薔薇の花。

18

みどりのなかに 生<sup>お</sup>ひいでた 手も足も風にあふれる薔薇の花。

## 19

眼にみえぬ ゆふぐれのなみだをためて ひとつひとつにつづり  
 あはせた 紅こうぎ玉ぎよく色いろの薔薇の花。

## 20

現うつなるにほひのなかに 現うつならぬ思ひをやどす 一輪のしづまり  
 かへる薔薇の花。

## 21

眼と眼のなかに 空色の時をはこぶ ゆれてゐる 紅あかと黄金こがねの薔  
 薇の花。

22

朝な朝な ふしぎなねむりをつくる わすられた 耳みみたぶ朶いろ色のばら  
 のはな。

23

かなしみをつみかさねて みうごきもできない 影と影とのむら  
 がる 瞳ひとみいろ色のぼらのはな。

## 24

ゆたゆたに にほひをたたへ 青春を羽ばたく 風のうへのぼら  
 のはな。

## 25

陽ひの色のふかまるなかに 突風ひのもえたつなかに なほあはあは

と手をひらく薄<sup>うす</sup>月<sup>づき</sup>色<sup>いろ</sup>の薔薇の花。

26

またたきのうちに 香<sup>か</sup>をこめて みちにちらばふ むなしい大輪  
のばらのはな。

27

はだらの雪のやうに 傷心の夢に刻<sup>きざ</sup>まれた 類のない美貌のばら  
のはな。

28

悔恨の虹におびえて　ゆふべの星をのがれようとする　時をわす  
れた　内気な　内気なばらのはな。

29

魚うをのやうにねむりつづける　澗れんえんとしたみづのなかの　かげろ  
ふ色のばらの花。

30

白鳥はくてうをよんでたはむれ 夜の霧にながされる 盲目めしひのばらのは  
な。

31

あをうみの 底にひそめる薔薇ばらの花、とげとげとしてやはらかく  
香気かほの鐘かねをうちならす薔薇の花。

32

けはひにさへも 心ときめき しぐれする ゆふぐれの 風にも  
 まれるばらのはな。

## 33

あをぞらのなかに 黄<sup>こがねいろ</sup>金色<sup>ぬの</sup>の布もてめかくしをされた薔薇の花。

## 34

微笑<sup>とりで</sup>の砦もて 心を奥へ奥へと包んだ 薄倅のばらのはな。

35

鬱積する笛のねに 去り<sup>さ</sup>がての思慕をつのらせる 青磁色のばら  
のはな。

36

さかしらに みづからをほこりしはかなさに くづほれ 無明の  
涙に さめざめとよみがへる薔薇の花。



# 青空文庫情報

底本：「世界の詩 28 大手拓次詩集」 彌生書房

1965（昭和40）年10月25日初版発行

1981（昭和56）年6月5日7版発行

※底本では一行が長くて二行にわたっているところは、二行目が  
1字下げになっています。

入力：湯地光弘

校正：丹羽倫子

1999年10月30日公開

2005年11月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 藍色の墓

## 大手拓次

2020年 7月12日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>